

第6室 書跡

「一法隆寺献物帳と古今目録抄一」

N-5 法隆寺献物帳（ほうりゅうじけんもつちょう）

天平勝宝8年（756）5月2日に崩御した聖武天皇の冥福を祈り、同年7月8日に、皇女の孝謙天皇が父帝の遺愛品などを金光明寺（東大寺）以下18カ寺に献納しました。この献物帳は、その時の法隆寺への献納物の目録です。縹（はなだ）色の麻紙に、中国・唐風の楷書で書かれています。末尾の藤原仲麻呂ら5人の署名はいずれも自筆です。本紙全体には、18顆の「天皇御璽」印が捺されています。

N-18 古今目録抄（ここんもくろくしょう）

法隆寺の寺誌や聖徳太子伝に関する秘伝を記したもので、別名「聖徳太子伝私記（しょうとくたいしでんしき）」ともいいます。13世紀前半に法隆寺の僧侶、顕真（けんしん）が上下2巻にまとめました。上巻では師の隆詮（りゅうせん）から伝授された法隆寺や聖徳太子伝の秘伝を記し、下巻では聖徳太子の舎人（とねり）の調使麻呂（ちょうしまろ）に関する伝記と自らが調使麻呂直系の子孫であることを述べています。なお、随所に顕真自身による加筆訂正の跡があります。

N-19 古今目録抄写（ここんもくろくしょううつし）

「古今目録抄」を室町時代に写したものですが、記事の量や順序には大きな違いが認められます。現在では、上中下3巻に分かれています。

第6室 染織

「一様々な技法の染織品」

法隆寺は飛鳥時代に創建され、現在もなお広大な伽藍（がらん）を誇る生きた寺院です。染織は「繡仏裂（しゅうぶつぎれ）」を中心として、飛鳥時代から奈良時代まで、献納宝物に伝えられる染織品のさまざまな技法を概観します。刺繡、錦、綴織、緋、絞り染めなど多岐にわたり、いわば古代の染織の宝庫と呼べるでしょう。この展示では文様とともに、各作品にみられる精緻な手技に注目します。

N-32-2,5 : 繡仏裂（しゅうぶつぎれ）

細い帯状の絹裂に、天衣を頭上に大きくひるがえす天人を表わした作品。強く撚った絹糸で文様の輪郭を縁取り、内部を細かく刺し、埋めています。刺繡した文様が表裏同じように現れる、非常に精巧な両面刺繡になっています。

N-32-1 : 繡仏裂（しゅうぶつぎれ）

天人の姿をあらわした刺繡作品。もともとは寺院の荘厳のためにかかげられた幡（ばん）よとばれる旗の下端から、複数下げられていた幡足（ばんそく）であったと考えられます。ひらひらとはためく幡足にふさわしく、表裏どちらからも見られるように、両面刺繡の技法が用いられています。大きく天衣（てんね）をひるがえし、儀式の場で文字通り大空を舞った天人の姿が偲べれます。

I-336-106 : 連珠円文刺繡（れんじゅえんもんししゅう）

鎖繡（くさりぬい）によって大型の連珠円文を表した残欠です。こうした文様は遠く西アジアに由来するもので、古代における東西の文化交流を示しています。

I-336-64 : 赤地花入連珠円文錦天蓋垂飾（あかじはないりれんじゅえんもんにしきてんがいすいしょく）

先端を鋭角な逆三角形とした天蓋垂飾です。主文には花を収めた連珠円文を置き、副文にはパルメット風の菱形の唐草文を表わしています。

I-336-1：赤地鹿文描繪綾天蓋垂飾（あかじしかもんかきえあやてんがいすいしょく）

先端を鋭角な逆三角形とした法隆寺の衿仕立ての天蓋垂飾。和紙を芯とし、表地の赤地の綾に墨と胡粉で鹿のような動物などを描繪で表わしています。

I-336-22：青緑地綾・紫地綾縫い合わせ（あおみどりじあや・むらさきじあやぬいあわせ）

幡の残欠で、幡身（ばんしん）とよばれる長方形の区画を囲む、二条の縁に相当します。入子菱繫文を表わした青緑地綾と紫地綾が用いられています。

I-336-35：紫地双竜二重連珠円文綾（むらさきじそうりゅうにじゅうれんじゅえんもんあや）

平織の地に、綾織で文様織り表わした作品です。本来は、二重の連珠円文のなかに双竜文を表わしていたと考えられ、本作にはその一部が認められます。

N-312：黄地葱花山形文綴錦残欠（きじねぎばなやまがたもんつづれおりぎれ）

色の境目で緯糸を折り返す綴織（つづれおり）という技法で、十字や山形といった幾何学文に、柔らかな曲線で表した葱花風の文様を織り表わします。綴織にみられる葱花風の文様は西アジアの染織にも見られ、西域から中国へ伝播したものと考えられます。仏教が盛んだった日本や中国では、葱花形を宝珠とみなしました。

I-336-54,55：縹地連珠襷花文錦（はなだじれんじゅたすきはなもんにしき）

小珠文による襷文内に四弁風の花文を納めた経錦（たてにしき）です。複数の色糸を一組とした経糸を、文様にあわせて浮き沈みさせ織り上げる経錦は、緯錦（ぬきにしき）に先行する古様な技法です。

N-46-2-2：茶地獅嚙動物文錦裂（ちゃじしがみどうぶつもんきんぎれ）

経錦（たてにしき）の断片です。口を開いた獅子にもみえる獅嚙文（しがみもん）の両側に、火焰宝珠（かえんほうじゅ）と動物を配します。動物は胴に斑紋（はんもん）をもち、背には火焰様の飾りを付けています。

I-336-91-1：茶紫地広東裂（ちゃむらさきじかんとんぎれ）

あらかじめ数色に染め分けた経糸（たていと）を用い、平織で文様を織り出した経緋（たてがすり）です。このような裂を広東（かんとん）と呼んでいます。インドや西アジアから

の技術に基づき、中国や朝鮮において制作された可能性が考えられます。

I-336-74：赤茶地花獅子連珠文錦（あかちゃじはなししれんじゅもんにしき）

連珠と唐草を伴った輪違風の円文を表わします。複数の色系を一組とした緯糸（よこいと）を用い、文様にあわせて色系を浮き沈みさせながら織る緯錦（ぬきにしき）です。本来は、円文のなかに横向きの獅子が織り出されていたと考えられます。

I-336-51：赤地亀甲繫花葉文錦（あかじきっこうつなぎかようもんにしき）

複数の色系を経糸（たていと）に用い、その浮き沈みで文様を織り表わした経錦（たてにしき）の残欠です。唐草風の亀甲の中に花文のようなモチーフを配します。類似する文様は、重要文化財「蜀江錦褥残欠」に見られます。

I-336-10：赤地花形目結文纈纈平絹幡足（あかじはながためゆいもんこうけちへいけんばんそく）

赤地に七曜文と方形の目結文を染めた纈纈（こうけち）の残欠で、裂の幅から本来は幡足であったと考えられます。纈纈は絞り染めのことで、小さな菱文を染め残すよう、ひとつひとつ摘まんでくくり、赤色に染色したものと考えられます。

I-336-15：紺地目結文纈纈綾（こんじめゆいもんこうけちあや）

平織の地に綾織で菱文を織り表わした裂に、黄で目結文を斜めに連続して染めています。地紋のある裂に纈纈（こうけち）を行なうのは珍しく、織りから染めの工程まで丹念に製作されたことがうかがえます。

I-336-17：淡黄緑地目結文纈纈綾（うすきみどりじめゆいもんこうけちあや）

平織の地にとろどころ糸を浮かせ点文を織った淡黄緑地綾に、目結文を斜めに絞り染めで表わした残欠です。纈纈だけでなく、細かく緻密に織り出された地紋にも、技術力の高さがうかがえる作品です。